



田村市立都路中学校

学校だより 第4号

平成30年 5月22日(火)
発行責任者：校長 田中 淳一
TEL：0247-75-2009

めざす生徒像：自らの志を語り、目標に向かって主体的に努力できる生徒

めざす学校像：志を育む学校 学び合い、高め合う学校 信頼され、愛される学校

1・2学年の学習旅行

5月16日(水)、1・2学年では学習旅行を実施しました。1学年は、いわきF Cパーク、アクアマリンふくしまを訪問しました。いわきF Cパークは、アンダー



アーマーという会社の物流センターに併設された、いわきF Cのホームグラウンド・トレーニング施設です。いわきF Cは、先日行われた天皇杯福島県代表決定戦で優勝し、全国大会への切符を手に入れました。生徒たちは、いわきF Cパークの職員の方から、F Cパーク建設の経緯、職員の方の志について話をいただきました。また、アクアマリンふくしまでは、東日本大震災にかかる施設再開までのエピソードを聞いたり、バックヤードツアーを体験したりしました。

2学年は、郡山市にある福島中央テレビ、F S Gカレッジリーグ(5つの専門学校の集合施設)で学習活動を行いました。午前中は、福島中央テレビにおいて、現役アナウンサーの方からお話をいただきました。また、ニュースセンターのアナウンス席で、ニュース原稿を読む体験をしました。“ゴジてれChu!”という番組のスタジオで、大橋聡子アナウンサーから、スタジオの設備や番組制作の苦労話、質の良い番組にするために必要なことなどを聞かせていただきました。午後からは、F S Gカレッジリーグに移動し、自分が希望した授業を受けました。保育士を目指す学校では、実際に“ちぎり絵”を制作しました。今回の学習旅行のような「社会とつながる学び」を、本校では今後も積極的に行っていきます。

【生徒の感想】

- ・ スタッフの方のお話を聴いて、地元への強い思いを感じた。心に残った言葉は、「スポーツで社会を豊かにする」というものだ。スポーツが楽しいと思うと、スポーツをやる人がもっと増えるのではないかなと思う。いわきF Cも、日本一になってほしい。
- ・ 「好きなことを好きにやる」という言葉が印象に残った。自分の好きなことで地元を元気にするということがすごい。自分も好きなことをたくさんやってみたい。



5月の全校朝会から

5月21日(月)、全校朝会を開きました。月1回の大切な朝会では、校長講話として、次のようなメッセージを全校生に贈りました。(一部省略)

メジャーリーグのロサンゼルス・エンジェルスで、投手と打者の二刀流に挑戦している大谷翔平選手。大谷選手は子どもの頃、バドミントンと水泳にも親しみました。彼のプレーを見ていると、タイミングを計って羽根を打つバドミントン、体力づくりや関節を柔らかくすることに役立つ水泳は、野球と無縁ではないことが分かります。また、大谷選手のお父さんも、かつては社会人野球の選手でした。しかし、お父さんは、「スポーツは本人が好きでやるもの。ガリガリやると嫌になるので、休む時間も勉強する時間にも必要だ。」との考えから、基本は押さえつつ締めつけないゆとりの指導で、小・中学校時代、大谷選手を伸び伸びと育てました。「早く土日が来ないかな、早く野球がしたいな。そういうふうに練習していたのが、自分に合っていたと思います。」と大谷選手は当時を振り返って語っています。



そんな大谷選手が、初めて自分の進む道を明確に意識したのが高校時代でした。そのきっかけが、花巻東高校野球部で実践していた、夢や目標を文字にすることでした。花巻東高の野球部員は入部すると、 $9 \times 9 = 81$ 個のマスを埋めます。中心に据えるのは一番大きな目標。大谷選手は、「ドラフト1位、8球団」でした。そして、周囲の8マスを、そのために必要な中目標で埋めます。中目標の周りのマスは、小目標で埋めます。目標が小さくなるに従って、やるべき行動は具体的になっていきます。「ただ、『140キロを投げたい』ではなく、そのために何が必要か具体的に考える。書き込むことで、やらなければならないことが見えてくる。計画と目標はセットです。大谷自身も、1つ1つのマスを考えていました。」と佐々木監督は語っています。



大谷選手が書いたマスの中で、私が注目したのは、「運」と「人間性」です。例えば、自分から挨拶をする、応援される人間になる、それがチームや自分の運を高めることになると、高校時代から大谷選手は明確に意識していました。野球以外の言動においても、とても好感の持てる彼の言動は、高校時代から意識して養ってきた人間力に裏打ちされたものであると言えます。また、大谷選手はグラウンドを離れると、本をよく読むそうです。その証拠に、マスの中に「読書」という言葉があります。大谷選手は、栄養学など体作りにつながる内容の本も手にして自分で学び、疑問があれば専門家に訊くそうです。「翔平君は興味の範囲が広い。『これについてはどうですか』と訊いてくる。」大谷選手をサポートしている管理栄養士さんは、彼の飽くなき探究心に驚かされたそうです。

このように、大谷選手はこれまでの人生において、野球の技能だけを追究してきたのではなく、目標を明確にして人間力を高めようと努力してきました。さらには、メジャーリーグで活躍するために、困難を恐れず踏み出す力、自分と異なる文化を持つ人たちと協力できる力、二刀流という新しいプレースタイルにチャレンジする力を身に付けようとしています。このような大谷選手の生き方は、彼だけに通用するものではありません。23歳の若者が大切にしている見方や考え方、そして言動から、皆さんは多くのことを考え、学ぶことができるのです。そのチャンスをぜひつかんでください。



